

日本の漢語

その源流と変遷

角川小辞典

28

佐藤喜代治



御

ます

が「御座る」となり、「ござります」「ございます」「ござんす」となる◇「御座」という疊は疊のこと◇「御座にぞましましてける」の「御座」は貴人の座席であり、敷く畳という◇後に広く敷物の「ござ」をいう◇「御さのむしろ」は「ござのむしろ」である

●漢語の理解が深まる●漢語の推移が把握できる●漢語の語源と歴史的背景が明らかになる●現代語とのつながりがわかる●各時代ごとの漢語の特色がわかる●引用文に



角川小辞典——28

日本の漢語

藤喜代治



日本の漢語 — その源流と変遷 —

著者・佐藤喜代治

発行者・角川春樹

印刷者・長宗泰造 東京都文京区目白台一の十七の六

製本者・若林義一 東京都板橋区舟渡三の二十の十三

発行所・角川書店 東京都千代田区富士見二の十三の三・郵便番号 102

振替口座東京三一 一九五二〇八・電話 03 (265) 七一 一一 (代)

初版・昭和五十四年十月二十日

装丁・代田 奨

製版印刷・厚徳社 製本・若林製本

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

0581-062800-0946(0)

©Printed in Japan

著者紹介

佐藤喜代治^{きよしろ}

大正元年九月、

宮城県に生まれる。昭和十年、東

北帝国大学法文学部卒業。国語学

専攻。文学博士。建国大学助教

授、神宮寺学館大学助教授、東北

大学文学部教授を経て、現在、東

北大学名誉教授、フェリス女学院

大学客員教授。

主要著作『国語学概論』『日本文

章史の研究』『国語語彙の歴史的

研究』『日本文法―理論と教育』

『講座国語史6 文休史・言語生活

史』(編)『国語学研究事典』(編)

序

東の海に横たわる日本列島、ここに東西の文化の波が相次いで押し寄せ、その文化とともに、異国のことばが日本語の中に入り込んだ。原始の日本語がどこから来たのか、どうして成り立ったのか、それも明らかではないが、確実にたどり得る限りでは、外来のことばが固有の日本語に溶け込んで、同じ日本語として通用している。外来のことばの中でも、日本語において特に重要な役割を演じているのは漢語である。漢語が、その文化とともに日本に伝えられたのは極めて古く、現代の日本語でも、固有の国語か、漢語か、その起源の確かでないものがある。単に古いというだけでなく、長い歴史を通じて、それぞれの時代に、漢語が新たに伝えられて、古い層の上に積み重ねられた。重層性とも言うべきものが漢語の特徴で、それは漢語の意味や、漢字の読み方、または表記の上に現われて、複雑多様な姿を見せている。

最近、元号問題が世間の論議を呼んだが、元号も中国から伝えられたもので、これも、特殊なものではあるが、一般に漢語を用いている。天武天皇の十四年（六八六）、「朱鳥」という年号が定められたが、これは『日本書紀』によれば、「あかみとり」と読む。これは漢字を訓読したのであって、初めに「あかみとり」という語があつて、これを漢字で書き表わしたわけではない。『扶桑略記』によれば、大和国から朱色きじの雉きをたてまつたということがあり、この瑞祥によって年号を定めたので、

中国の思想に基づくものである。これより先、孝徳天皇の大化六年（六五〇）には「白雉」と改元されたが、これは「しらぎぎす」と訓読している。後には、中国の經典から文字を選び熟語を造って、これを年号と定め音読するならわしになっている。元号の要不要はしばらく別として、元号を定める場合も、必ずしも漢語によらず、和語による元号を考える余地があるであろうが、そういう意見を耳にしない。

問題を元号に限ってみても、中国の文化に伴う漢語の力がいかに根強いかを思い知らされるのである。このように、国語の中で重要な地位を占める漢語について、その大要を知る手引きとして、若干の語を選び、その起源と変遷をたどってみることにした。ここに選んだ漢語は、著者が今まで考察を試みてきたものを中心としたのであり、漢語全体の中では、数も少なく、片寄りを免れないと思うが、基本的な語彙を主とし、その歴史的背景を明らかにして現代語とのつながりを考え、また、それぞれの時代の特色をとらえ得るように努めた。

最近、語源に関する関心が高まっているが、漢語の語源をたどるとき、漢籍や仏典にさかのぼらざるを得ず、それは広汎多岐にわたる。わが身を顧みず、敢えて説を試みたものもあるが、力の及ばないところがあるのはよしなきことである。なお、語源は、語の素性を知る上で必要であるが、それにも増して大切なのは歴史的な変遷である。人間の場合、「氏より育ち」と言うように、ことばも、その発生だけでなく、消長変遷に目を向ける必要がある。語の変遷をたどることによって、現代語とのかわりが明らかに、それは現実の生きた問題となる。かつ、日常なにげなしに使っていること

ばでも、立ちどまって考えるとき、それぞれのことばに歴史があり、物語があることに気づく。名も無い人間にも、それぞれ履歴があり、物語があるのと同じである。ことばも人間も、それぞれの経歴を知るとき、我々にとっては意味のある存在となり、どんなに扱うことはできなくなる。ことばの歴史は、同時に、そのことばを使った人間の歴史でもある。漢語の源流を究めることによって、日本と大陸とはいかに異なるかを知り、また、漢語の変遷をたどることによって、大陸の文化が日本の中でどのように変化していったかを知ることができる。

このような観点から、数は限られているが、漢語の様相を多面的に観察するように心がけた。調査した資料も限られていて、不備を免れず、予期せぬ誤りもあるかと思う。従来、日本の漢語と、中国の漢語と、両者の関連を考えながら、発達変遷を総合的に研究することはまだ十分に行われていない。本書が研究の前進に幾分でも役立つことができれば仕合わせである。

昭和五十四年八月

著 者

凡 例

一、初めに、「漢語概説」において漢語の概略を述べ、次に、古代・中世・近世・近代の四つの時期に分けて、各時代における漢語の推移を概観し、その時代と関連の深い語について、發達変遷を述べた。時代による語の分類は便宜的などところがある。

二、説明のために引用した本文は、特に原文通りの表記を必要とする場合を除き、本文の片仮名を平仮名に改めたものがあり、また、適宜、仮名を漢字に改め、送り仮名・振り仮名を加えて読みやすくした。

三、引用した本文については、必要に応じて、大意を述べ、どんな文脈の中で用いられたかがわかるように、前後の事情を説明した。

また、引用の本文の中で用いられた語句についても、適宜、注解を加えた。注解を加えた語句は巻末の索引によって所在がわかるようにした。なお、「漢語概説」、および各時代の「概観」に例としてあげた漢語も、同じく索引において所在を示した。

四、引用した本文については、できるだけ原文を調べて正確を期したが、すべてにわたって調査する余裕が無いために、他の文献の引用によったものが若干ある。なお、しばしば引用した『法苑珠林』は寛文九年版本（百二十巻）によった。

目 次

凡 例	1
-----	---

漢語概説	1
------	---

1 漢語の概念	3
---------	---

1 漢語の内容	3
---------	---

2 梵語	6
------	---

3 漢語でない語	7
----------	---

2 漢字音	13
-------	----

1 単音節の言語	13
----------	----

2 吳音・漢音	21
---------	----

3 七音と吳音・漢音	26
------------	----

4 二百六韻と吳音・漢音	35
--------------	----

5 字音の変化	75
---------	----

3 語構成	91
-------	----

1 中国語の文法	91
----------	----

4 造語	8
------	---

5 音訓の併用	11
---------	----

6 音便	78
------	----

7 連声	81
------	----

8 吳音・漢音の混用	82
------------	----

9 唐音	83
------	----

2 語の種類	92
--------	----

3 複合語の構成

96

4 漢語の影響

1 和製の漢語

106

2 漢語の和訳

106

5 漢語の伝来と変遷の概観

1 漢語の伝来

125

2 変遷の概観

129

古代の漢語

概観

135

あんない〔案内〕

141

いし〔椅子〕・しようにし〔床子〕

144

おちど〔越度（落度）〕・はつと〔法度〕

147

がくしように〔学生・学匠〕・しよせい

150

〔諸生・書生〕

155

かんじよう〔勘定〕・かんどう〔勘当〕

158

きよう〔孝〕・ふきよう〔不孝〕

160

きようざく〔警策〕

164

きようじやく〔景迹〕

168

くつ〔屈〕・きゅうくつ〔窮屈〕・た

173

いくつ〔退屈〕

176

けいめい〔経営〕

173

げんき〔減気〕〔元氣〕

174

こーごー〔胡〕〔胡麻・胡粉・胡蝶・胡椒〕

176

ご〔期〕・じんご〔尽期〕

181

ごき〔御器〕

184

ざえ〔才〕・さいかく〔才学（才覚）〕

190

さう〔左右〕

193

しゅん〔旬〕

197

しょう〔請〕・ふしょう〔不請（不承）〕

199

すじよう〔種姓〕〔素性〕

205

中世の漢語

概 観

ずちなし〔術無し〕

207

たいふ〔大夫〕

210

たんじよう〔誕生〕

214

ちしき〔知識〕・ゆうそく〔有識〔有職〕〕

217

ちようず〔調ず〕

220

ちようてい〔朝廷〕

224

ちようど〔調度〕・したく〔支度〕

228

とうざい〔東西〕

232

ひようし〔拍子〕

234

ほつー〔発ー〕〔発動・発熱・発作・発

236

足・発端・発露〕

242

よそ〔余処〕

243

ろうろう〔牢籠〕

246

ろん〔論〕

255

おうへい〔横柄〕・おうりよう〔横領〕

265

おうわく〔枉惑〕・とうわく〔倒惑〔当

267

惑〕〕

271

がい〔雅意〕

273

かいどう〔海道〔街道〕〕

275

かんねん〔観念〕

277

きようがい〔境界〔境涯〕〕

280

けっかい〔結界〕

287

ごうじよう〔強盛〔強情〕〕

293

こうみよう〔高名〔功名〕〕・ふかく

298

〔不覺〕・かくご〔覺悟〕

284

ござ〔御座〕

287

こつがら〔骨柄〕

290

さいげん〔斉限〔際限〕〕・ぶんざい〔分

294

斉〔分際〕〕

298

ざんき〔慚愧〕・むざん〔無慚〕

300

さんこん〔三猷〕・くこん〔九猷〕・さ

304

んさんくど〔三三九度〕

309

じぎ〔時宜〔辞儀〕〕

314

しきだい〔色代〕

319

近世の漢語

しょうがい「生涯」	311
しょうじ「勝事(笑止)」	313
しよたい「所帯」・せたい「世帯」	318
しんじ「進止」	320
ぞう「雑」(雑色・雑役・雑用・雑魚・雑作・雑炊)	322
だんご「団子」	325
とうかん「等閑」	328
どうし「同志」(同士)	329
ばか「破家(馬鹿)」	331

ひきよう「比興」(卑怯)	334
ひけい「秘計」	337
ぶつ「物」(物騒・物狂)・もつ	339
け「物怪」	339
へん「一篇」(常篇・同篇・一篇・両篇・武篇)	344
み「微」(微妙・微笑・微塵)	349
りうん「理運(利運)」	351
りようけん「料簡」	354
りようそく「料足」・むそく「無足」	355

概観

いち「位置」	370
えんそ「塩酢」・えんばい「塩梅」・あ	371
んばい「按排」	373
かつこう「恰好」	375
かんけい「關係」	376
ぎよう「仰」(仰・仰々しい・仰山)	376

けんきゆう「研究」	379
じようだん「冗談」	381
じよさい「如在(如才)」	382
しんまく「慎莫」	386
せいよう「西洋」・とうよう「東洋」	388
たいそう「大層」	390

索引

きー「機」(機械・機関・機会・機運・
機微・機密) 426
げいじゅつ「芸術」・びじゅつ「美術」 430
けってん「闕典(欠点)」 432
ーけん「一件(事件・物件)」 434

げんそ「元素」・ようそ「要素」 436
こじん「個人」 437
せいねん「青年」 439
とうてい「到底」・とうとう「到頭」 442

近代の漢語

概観

ーちやく「一着(頓着・悶着・撞着・
落着・決着)」 392
てんごう「顛狂」 396
ーとう「一道(天道・政道・公道・無道)」 399
ーとく「一得(説得・会得・納得・拾得)」 402
はいもう「廢忘」 406

ふくぞう「覆蔵(腹蔵)」 408
ほうだい「傍題(放題)」・ほうばい
「傍輩(朋輩)」 409
めいげつ「名月」・みようじん「明神」 411
ろくじ「陸地」・ろく「陸」 413

漢語概說

1 漢語の概念

1 漢語の内容

漢語は、もともと、中国から伝えられて日本語になったことばであり、また、これを基にしてわが国で造られたことばをいう。漢語に伴って伝えられた漢字を固有の日本語で読む場合、その読み方を訓、または字訓といい、中国語における、もとの読み方に基づいて読む場合は、音または字音という。「一」「二」「三」を「ひとつ」「ふたつ」「みつ」と読むときは字訓であり、「いち」「に」「さん」と読むときは字音である。前者は固有の国語で、後者は漢語である。したがって、漢語は、多くの場合、字音によって漢字を読む場合のことばと言ってもいいわけである。

「中国から伝えられたことばは、おおまかに二つの系統に分けて考えることができる。一つは、中国固有の生活・文化の中で発達したことばであり、他の一つは、中国に伝えられた外来文化に伴って発達したことばである。」この外来文化の中で、わが国に最も関係が深いのは仏教とそれに伴う種々の文化である。中国固有の文化において最も重要なものは儒教であり、儒教は精神的文化として、思想上重要な意義を有するだけでなく、その実践的な性格によつて、個人・家庭・社会のすべてにわたって実際の生活にかかわりをもっている。たとえば「仁」とか「義」とか、儒教の徳目は固有の日本語には無かったものであり、「義理」のようなことばは、現代においても日本人の日

常生活をささえる重要な徳目である。「仁」「義」あるいは「義理」などの語は、初めは日本語で翻訳することがあったとしても、やがて異国のことばをそのまま用いることになったと思われる。『続日本紀』天応元年四月三日の条に、光仁天皇の讓位の宣命が載せてある。その中に、

それ仁孝は百行の基なり。

ということばがある。宣命は勅命を宣べ伝えるという意味で、みことのりを話しことばのままで伝えるという性格をもつものであるが、「仁孝」という語は字音のままに言ったものと思われる。

中国文化では、儒教が最も支配的であるが、その支配の下にあって、種々の芸術や技術が発達した。農耕が主要な産業となった社会においては気象に依存することが多く、天文・暦術の学問が発達し、それは政治上の重要な問題であった。また、人間の生活に欠くことができないのは医療の技術であり、医学、および、薬学としての本草の学問も発達した。これらの学術の発達に伴って、種々のことばも生まれた。『漢書』藝文志には『五藏六府十二病方』『風寒熱十六病方』など、医学書の名が見えるが、この「方」という語は今もわが国で「処方」などの語として使われている。『隋書』経籍志には『俞氏療小兒方』という書名も見え、その注には梁の時代に『范氏療婦人藥方』という書があったことを記していて、小兒科・婦人科など、専門が分化する方向を示している。『和名類聚抄』(二十卷本)には丹藥・膏藥・丸藥・散藥・湯藥・煎藥に分けて、藥の名を列挙している。「丹」はもともと赤色の飲物をいう語であるが、「丹藥」は靈藥といわれる特に貴重なもの。「湯藥」は、湯に溶かし、「煎藥」は、煎じて用いる藥と考えられる。「丹」「膏」「丸」「散」「湯」などは後に至るまで藥の名に用いられている。「煎」も、鬚つけ油の一種で、「膠經煎」というのが能狂言などに見える。

薬品として用いる植物は、わが国にもとから存在したもので漢語でよぶ習慣がある。たとえば「おけら」を

『万葉集』では「うけら」といつている。これを漢語で「白朮^{びやくじゆつ}」といい、薬用とする。仮名草子『昨日は今日の物語』に、しゃれを言うことの好きな人の話があつて、召使を白朮を掘りにやり、人々を集めてもてなし、召使が帰つて来て「白朮を掘つて来ました。」と言つた時に、「そこにおけら。」と言おうとたくらんでいた。ところが、実際、召使が帰つて来て「おけらを掘つて来ました。」と言つたので、思わず「そこに白朮」と言つてしまった。主人はせっかくたくらんだしゃれを言いそなつたのである。

(二)の一例でもわかるように、漢語は、固有の日本語で相当するものが無く、翻訳できない場合だけではなく、固有の日本語で言い換えることができる場合にも漢語を用いることが行われている。漢語はその背景に高度の文化が厳存し、漢文化に対する尊崇によって漢語の使用が必要の度を越えて盛んに行われたと言ふことができる。しかし、単にそればかりでなく、漢語は簡潔で含蓄に富むという特色があり、これに対して、固有の日本語は、すべての音節が母音で終わるといふ、いわゆる開音節の言語であつて、複雑な内容を表現するときは、ことばが冗長になりやすい。漢語はこの短所を補う力があつて、漢語を多く用いる理由の一つはこの点にあると言える。ただ、固有の日本語は、冗長になりがちである半面、省略によって表現を簡潔にする方法が無いわけではない。漢語にたより過ぎることが日本語の造語力の発達を妨げたと見えるであらう。いずれにせよ、歴史的事実として見るとき、漢語が国語の中で大きな勢力を占めてきたのは、主として、わが国が中国文化の圏内にあつたことによるのであるが、同時に、固有の日本語の内部にその原因があつたことは見のがし得ないところである。

(次に、仏教は後漢^{ごかん}の末に中国に伝えられ、南北朝時代から隋唐にかけて興隆し、その余波がわが国にも及んだ。おびただしい仏典の漢訳が行われ、それらの経論がわが国にも伝えられた。弘法大師が中国から請来^{きやうらい}した経律・論・疏章^{そしやう}・伝記、合わせて二百十六部、四百六十一巻と、その請来目録に記してある。これらの仏典を通して伝え